

笑顔と心をつなぐネットワーク

HEARTful

はーとふる

2019年
春・夏
合併号

■特集

なぜ、 あなたはボランティアするの？

インタビュー 曾野 綾子さん

ボランティアの効能 村上 和雄さん

「明るい社会づくり運動提唱50周年記念大会」開催

| 連載 |

Meisha アーカイブ ~50周年記念寄稿~

われら明社人 (東京明るい社会づくり運動区部協議会)

被災地レポート「手芸カフェ」



地域とともに歩む 明社活動



明るい社会づくり宮崎県推進協議会会長・宮崎大学教授

添田 佳伸

宮崎県内で現在、活動をしている地区明社は3団体ありますが、その一つに「明るい社会づくり運動宮崎市推進協議会（宮崎市明社）」があります。宮崎市明社が毎年、行っている活動の中で最も大きなものは、「宮崎市戦災死没者慰霊祭」です。戦時中、空襲等で命を落とした民間の戦災死没者の慰霊供養をする行事です。昭和42年8月9日に宮崎市の天神山に宮崎市戦災死没者遺族会によって慰霊碑が建立され、その後毎年その慰霊碑の前で慰霊祭が続いています。宗旨宗派にとらわれないとの考えで、神式と仏式を隔年交代で行っています。宮崎市長を始め、多くの来賓、遺族の方々に参列していただいています。昭和20年5月11日に宮崎市でも空襲がありました。天神山の慰霊碑には110名の方々のお名前が刻まれています。そのときの空襲で亡くなられた方もその中に含まれています。

来事だったそうです。亡くなられた子どもの一人である山下陽君のお母さん山下久子さんがその後、供養碑（いとし子の供養碑）を建てられました。暫く通学路であった道端にその供養碑は置かれていましたが、平成17年に母校である現在の宮崎大学教育学部附属小学校の敷地内に移されました。多くの方々のご尽力で移設に至りましたが、宮崎市明社もその一端を担えたのではないかと思います。いとし子の供養碑には、12名の子どもの名前とともに「いとし子への誓い」の言葉が刻まれています。現在、附属小学校の子どもたちは、毎日登下校の際、校門の横にあるいとし子の供養碑に手を合わせています。また、毎年5月に「いとし子命の集い」という集会を附属小学校の学校行事として行っています。私自身も、学部長時代、そして現在は附属学校園統括長としてこの集いに参加し、黙祷、献花をするともに、世界平和を祈念させていただいています。

ごあいさつ

本年は、「明るい社会づくり運動」が提唱されて50周年を迎えました。私ども特定非営利活動法人明るい社会づくり運動では、この新たな時代の幕開けを記念して本誌「はーとふる」をリニューアルしました。皆様と共に耀きある日々を未来へつなげていけるよう、努めてまいります。

特定非営利活動法人 明るい社会づくり運動

Contents

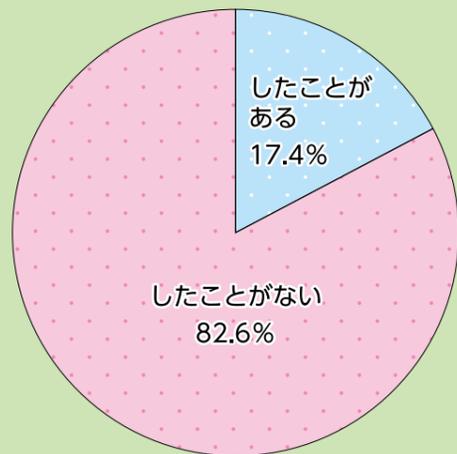
はーとふる2019年 春・夏合併号

【目次】

耀メッセージ

- 2 特集 なぜ、あなたはボランティアなの？
- 10 明るい社会づくり運動提唱50周年記念大会
- 14 Meishaアーカイブ
- 17 世界の現場から日本が見える
- 18 われら明社人
- 21 被災地レポート—— わすれない、いつまでも
- 22 全国都道府県会議を開催
- 23 全国清掃キャンペーン
- 24 総会報告
- 掲示板
- 耀!連隊 明社レンジャー

（ データで見るボランティアの現状 ）

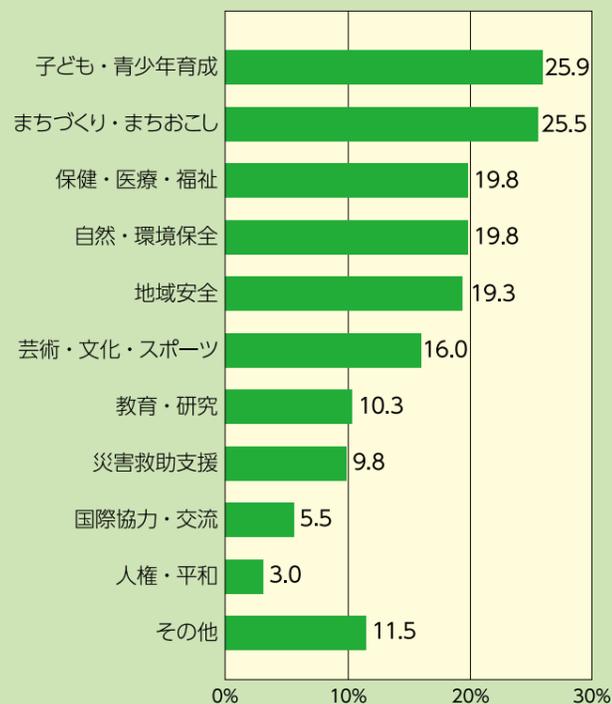


◆ボランティア活動を経験した人たち

平成27年の1年間にボランティア活動をしたことがある人は**17.4%**です

◆こんなボランティア活動に参加してます！

平成27年の1年間にボランティア活動をしたことがあると回答した人が参加した分野



◆参加した理由は、これです！

ボランティア活動を「したことがある」と回答した人の参加理由



『平成28年度 市民の社会貢献に関する実態調査報告書』（平成29年3月／内閣府）より

特集 なぜ、あなたはボランティアするの？

いま、いろいろな場面でボランティアの活躍が期待されています。それは、身近な人助けから国際貢献まで幅広い分野で取り組まれています。しかし、ボランティアをする意義や価値観はそれぞれが違います。「知人から誘われて」「以前から関心があったから」「近所の公園の枯れ葉が舞うから掃除した」など、参加したきっかけもさまざまだと思います。そして、参加してみたら、「仕事仲間や同級生とは違った価値観や個性を持った人たちとの出会いがあり、視野が広がって新しい自分の再発見につながった」という人もいます。みなさんはいかがですか——。

今号では、曾野綾子さん（作家）と村上和雄さん（筑波大学名誉教授）のお話を掲載するとともに、ボランティアとして取り組まれている方たちを紹介します。



ボランティアとは——

ボランティアの語源は、ラテン語の「ボランタス (Voluntas)」で日本語訳にすると「自由意思」。フランス語の「ボランティ (Volunte)」は「喜びの精神」を意味するといえます。そして、英語の名詞だと「ボランティア (Volunteer)」、動詞だと「自発的に申し出る」という意味があります。この語源から探ると、ボランティアとは「自分の意思で自発的に行なう」ことなのです。

ほとばしる 善意の気持ちを 大切に

長年にわたり世界の開発途上国を訪れ、援助活動を続けてこられた曾野綾子さん。一時、日本財団の会長を務められ、多くの支援活動に携われてきました。今号では、「ボランティア」をテーマにお話をおうかがいしました。

曾野 綾子さん 作家

——最近、ボランティアに対する意識が高まっているように思います。何がきっかけだったのでしょうか。

1995年に起きた阪神・淡路大震災が大きな契機になったと思います。
その2年後の97年には、ロシア船籍のタンカー・ナホトカ号（1万3157総トン）が、航行中に島根県近海で浸水によって沈没し、大量の重油が広範囲に流れ出しました。海上保安庁や海上自衛隊が出動したほか、地元住民に加えて全国各地から個人・企業・各種団体がボランティアとして参加し、のべ30万人近くが回収作業を行いました。

方々と共に活動に取り組むことがあります。どのような人間関係を築いていくことが大事なのでしょう。

ボランティアに参加すると、さまざまな方と一緒に活動することもあると思います。そのようなとき、ともすると、見た目でいい人、悪い人と判断してしまいがちですが、一時間か二時間一緒に活動したからといって、いい人か悪い人かはわかるものではありません。ですから、いい人、悪い人という感情を抱くのではなく、

お互いを認め合いながら活動していくことが大切だと思います

やってくれた行為のみに感謝すればいいのではないかと思います。

実は、私は性格的に明るくないので、「明るく」というのができないのです。でも、明るくなくてもいいですよ。自分が少しでも得意なことをすればいいですよ。黙って床の雑巾ぞうじがけをしている方の存在も貴重なんです。

世の中には、暗い人も明るい人もいます。でも、どちらがよくて、どちらが悪いということはありません。どちらも必要で大切です。

例えば、暗くて悲観的なものの方ができるから「防災」について考えることができる

厳冬期の1月でしたので、海からの冷たい風が吹き荒れる海岸での作業は過酷で、「ボランティア活動には危険もつきまといまう」という事実が世間に知られました。そのため、ボランティア活動を行う者に対して「ボランティア活動保険」への加入を積極的に勧めるようになりました。

これ以降、ボランティアを受け入れるノウハウがずいぶんできたんですよ。2011年の東日本大震災では、各都道府県の社会福祉協議会が中心となってボランティアセンターを設立するなど、全国から駆け付けた大勢のボランティアの受け入れ体制がつけられました。

人間は、災害から学びます。起きてしまった不幸や災難をできるだけプラスに変え、将来に向けての大きな力に変えていかなければいけないんですね。

起きてしまった不幸や災難をプラスに変え、将来に向けての力に変えていかなければいけないんですね

——社会に貢献していくこと、人のために役立つということはどういうことなのでしょうか。

誰が見ても分かるような大きな社会貢献を目標とすることは、人のために役立つことだけ考えられます。世の中で起きそうな悪いことだけ考えられる人の存在も大切ですからね。
暗くて悲観的に考える人も、明るく考える人も、全部、必要です。みんな大切なんです。お互いにどちらも必要だということを認め合いながら活動していくことが大切だと思います。

——ボランティアに取り組むうえで、私たちが心掛けていくこととはどんなことなのでしょうか。

人のために何かをできた後は、やってあげたことを忘れることです。自分のしたことなんか忘れて軽々としてください。

私たちは、報酬をいただきたくて、ボランティアに参加しているのではないと思います。やってあげたことで、気がつくとき自分から、既に報酬をいただいているのですね。

私たちカトリック教徒の多くは、人のために小さな善意の行いができた時、「神に感謝！」と笑っています。また、修道院では、すべてのものを分け合います。例えば、訪問してきた方がお土産におはぎを5個持ってきてくださったとします。修道院に25人いた

指すならば、それ相応の組織や多額の費用が必要ですよ。私が一時、働いていた日本財団では、社会貢献に取り組む組織を支援していて、拠出額は「億」単位の大きな支援でした。

そうした組織立った取り組みとは違って、私たち一人ひとりの行為に目を向けてみると、個人ができることは些細なこともかもしれません。しかし、大上段に構えて、金額やカタチにとらわれるのではなく、「お役に立ちたい」「ちよつとお手伝いしてあげたい」という気持ちのほとばしりが、社会貢献とは何かを考える上で大事なのだと思います。

最近では、隣近所のお付き合いでも、深く入り込まないほうがいいといわれているようですが、隣の家の方が高齢者で、生け垣が切れないのでちよつと手伝うとか、お買い物をしてあげるといったこともよいかもしれません。

私の夫は生前、段差のある通路を、乳母車を押して歩いている女性を目にすると、必ず手伝っていました。たとえ小さなことでも、お手伝いできる範囲のことをしたらいいのです。自然にほとばしる善意の気持ちが広がっていくことが、つまりは、社会に貢献しているといえるのではないのでしょうか。

——ボランティアをするなかで、価値観の違い

ら、5個のおはぎをみんなで分け合うのね。自分のものを差し出すとき、人にはさまざまに気持ちが変わります。なかにはあさましい気持ちになるところもあるでしょう。私などは、自分のあさましさを結構認めておもしろがる性格だから、その都度、自覚しています。つまり差し出すという行為の一つのなかで、自分の気持ちのありようを学べるのです。

そして、もう一つ。親切にしていたときには、受けた恩をどこかでお返しすることです。3か月以内とか1年以内とか、お返しができるチャンスがいつか巡ってくればいいわけです。そのような親切とお返しとの輪が自然と広がっていくことが、何より大事な「社会への貢献」ではないのでしょうか。

まずは、あなたの親御さん、きょうだい、親戚、そして隣人を大切にすることから始めてください。



Profile その あやこ

東京都生まれ。1954年、聖心女子大学英文科卒業。同年発表の『遠来の客たち』が芥川賞候補となり文壇デビュー。以降、多くの作品を発表。また海外法人宣教師活動援助後援会会長として世界各地でも援助活動に参加している。1979年、ローマ教皇庁よりヴァチカン有功十字勲章、恩賜賞・日本藝術院賞、吉川英治文化賞、菊池寛賞など。近著に『夫の後始末』がある。

私がボランティアに参加する理由^{わけ}

身近な小さなことに心を寄せて



小田切秋子

〔横須賀友都ピア〕実行委員長

地域の児童養護施設でカットボランティアを始めたのは50年前のことです。学生時代に、その児童養護施設の子どもたちと交流をしていたこともあり、美容師の資格を取ってからは毎月、カットボランティアに訪ねるようになりました。

施設では、複雑な事情を抱えた子どもたちが生活をしています。現在、この施設の子どもたちの98パーセントが虐待で入所しています。

髪を切っただけながら、たあいなお話をするのがうれしかったのでしょうか、私の訪問をとっても楽しみにしてくれています。そんな子どもたちの姿を見るのが、私にとっても喜びになりました。そして、子どもたちと触れ合うなかで、私は、美容師としての技術を磨かせていただけただと感謝の気持ちを抱いています。

その子どもたちもやがて成長し、18歳になると施設から巣立っていきます。なかには、いまは結婚して、わが子を連れて一週間に一度、実家に帰ってくるように私の美容室に来てくれる子どももいます。つながりを

もち続けられることは、本当にうれしいことですね。

いまは、カットボランティアとして訪問することもなくなりましたが、子どもたちの応援団長ともいうのでしょうか、この児童養護施設の後援会副会長を務め、親御さんの事情や虐待などで心が傷ついているお子さんたちの支えになりたいと願っています。

また、23年前からは、知的障がい者の施設でカットボランティアを続けていて、入所者の方たちが元気ですごせる街づくりに取り組んでいます。

そんな私の経営する美容室は、どこからかお聞きになってくるのか不思議ですが、近隣の方が訪ねて来られ、便利屋さんのごとくいろいろな頼まれごとをします。特にご高齢の方は、「電球が切れたから取り替えてくれる?」「屏から飛び出した枝が切れないから、切つてくれますか?」と生活をする上で困ったことを手伝ってほしいというお願いなのです。

もちろん忙しいときもありますが、できるだけ要望にお応えしたいと思いい、美容室のスタッフと一緒にうかがっています。これからも身近な小さなことにも心を寄せ、私にできることを、できるときにさせていただくつもりです。そのためにも、いつも心柔らかに、謙虚な気持ちで対応していきたいと思えます。



出合いが継続の力に



三ツ口勝弥

〔名古屋を明るくする会 会員〕

私が愛知県名古屋市内の「西一社中央公園」の清掃活動に参加するようになって20年になります。「名古屋を明るくする会」の先輩方からお誘いを受けたことがきっかけでした。

お誘いを受けて参加し始めたころは、一年に2回、公園の掃除をすればよいのだろう」という軽い気持ちでいきましたが、回を重ねていくうちに、清掃活動についていろいろと考えを巡らすようになっていたのです。

清掃用具の運搬やゴミ袋の準備、メンバーへの連絡、そして、一人でも多く地域の方々にご参加いただくにはどうしたらよいのだろうか……。気がつくくと、先輩方のお話を継いで、私が公園清掃の中心の立場になっていました。以来、清掃活動の日には、わが家に保管してある竹ぼうき、スコップ、熊手、ちり取り、一輪車などを積んで、集合時間の8時に間に合うように車を走らせます。

当初、この清掃活動の参加者は、「名古屋を明るくする会」のメンバーだけでしたが、私たちが清掃をしている姿を見て、飛び入りで参加くださる地域住民の方がいました。人数にこだわらず、一人でも二人でもお集りいただいた方たちとの出合いを大切に、「楽しく清掃をさせてください」という気持ちで取り組んできましたが、やはり地域住民の方と一緒に活動をしてくださることはうれしいことでした。

数年前には、町内会の有志をはじめ名東区役所の協賛を得られ、名東区

の「名東の日・区民まつり」のパンフレットに、私たちの清掃活動が区民参加イベントとして掲載していただけるようになりました。そして、今年、チラシを地域住民の約400世帯に配布しました。どなたがご参加くださるか、当日の朝にならないとわかりませんが、それでも「どんな方がおいでくださるかな……」と考えるだけで、期待で胸が膨らみます。そして、お集りいただいた方々とわずかに2時間であっても共に活動をする中で、自然と言葉を交わし、気持ちがつながったように感じます。また、園内を見渡すと、公園の片隅に、40リットルのゴミ袋が次から次に積まれていき、春は50袋、落ち葉の季節は140袋ほどになります。すっきりときれいになったことがよくわかりますが、何より、自分自身がすがすがしい気分を味わえます。

作業が終わると、だれもが達成感と充実感ともいえるのでしょうか、とびっきりの笑顔を見せてくれます。この瞬間、「ああ、清掃活動が続けてきてよかった」と思わせてもらえます。これが清掃活動を継続してきた力になってきたのだと思います。

人と人をつなげてくれる大切な場となった清掃活動を続けていくためにも、これからは後継者へつなげていきます。



ボランティア活動をとおして さまざまな体験をしてみたい



弓野真輝

(茨城県水戸市・中学2年生)

昨年、中学に入学してまもなく、担任の先生から「ジュニアリーダーズ募集」のチラシが配られました。それを見て、ぼくはボランティア活動にとっても興味をもちました。

ジュニアリーダーズとは、地域の青少年育成会が取り組んでいるボランティア体験の組織で、地域で行われる「子ども会」やお祭りなどの手伝い、そして、研修キャンプに参加できると書かれていたからです。以前から、ボランティアを通していろいろな体験をしてみたいと思っていたので、すぐに友だちを誘って応募しました。

しかし、中学生としての生活が始まると、学校の勉強や部活などに追われ、ジュニアリーダーズの活動には、なかなか参加することができませんでした。ようやく参加できたのは、今年の2月に開催された「明るい社会づくりポスターコンクール」(明るい社会づくり運動水戸ブロック主催)の表彰式のボランティアでした。

当日は、準備のために朝早く家を出て、会場となる水戸総合教育研究所へ向かいました。会場に着いてわかったことですが、ジュニアリーダーズからのボランティア参加が、ぼくが一人だったということです。少し心細く思いましたが、会場係の方たちから「弓野くん、これ運んで!」「ポスターの張りだしを頼むよ!」など、さまざまな仕事を頼まれていくうちに不安は吹っ飛び、力がわいてきました。しかも、少しお手伝いしただけなのに、みんなから「ありがとう!」と言っていただき、ぼく自身がうれしい気持ちになるのがわかりました。

この式典のボランティアを終えて帰宅してから、母にその日の出来事を話しました。すると母は、「表彰式のボランティアをしたことで、たくさんの年長者とかかわりながら、人として大切なことを学べたのね。よかったわね」と笑顔で言ってくれました。僕自身、ふだんでは感じられない充実感と喜びを感じることができた一日でした。

ボランティア活動をするなかで、いろいろなことを学べるのだと思います。これからも自分の将来に役立てられるよう、ボランティアの機会を大切にして経験を積んでいきます。



私たち、みんなでボランティアしてます!

和白干潟アオサのお掃除大作戦

福岡地区明るい社会づくり運動協議会

毎年、9月頃になるとアオサが発生し、干潟に生息しているアサリなどの生物が死んでしまったり、積もって腐ると悪臭が発生するなど、近隣住民の間で問題になっていました。それならば、アオサが大きくなる前にみんなで回収してしまおうと「アオサのお掃除大作戦」を和白干潟を守る会と共に始めて、8年になります。

最近、干潟の近くの住民の方々が参加されるようになり、小学生から80歳を超えるボランティアが共に作業をし、心地よい汗を流しています。アサリがたくさん採れ、渡り鳥がやってくる「和白干潟」を守るために、今後もこの活動を続けていきます。



ボランティアの 効能



筑波大学名誉教授

村上 和雄

□ スイッチオンにする条件 □

人間を含めてあらゆる生命体は、一個の細胞でできているか、もしくは多数の細胞が寄り集まってできている存在です。人間の大人の体にいたっては、約40兆個という膨大な数の細胞から成り立っています。しかも、細胞一つひとつの構造は同じであっても、つめや皮膚、髪の毛、心臓など、まったく違った組織をつくり、それぞれ固有の働きを担っています。それができるのは、細胞内にある遺伝子のおかげです。つまり遺伝子が、私たち生物の「生きる営み」のすべてのカギを握っているのです。

では、その遺伝子によりよく働いてもらうためにはどうしたらよいのでしょうか。

遺伝子にはスイッチのようなものがあり、オンとオフの機能があるということが、長年の研究のなかでわかってきました。しかも、「思い」が遺伝子の働きをオン/オフにすることを確信するようになったのです。感動、喜び、イキイキワクワクすることが、「良い遺伝子」のスイッチをオンにし、悲しみや苦しみ、悩みが「悪い遺伝子」のスイッチをオンにすることです。

遺伝子のスイッチをオンにするには、「環境の

変化」「人との出会い」「志と使命」そして「他を利する生き方」があります。これらの条件によって、遺伝子に働きかける効果が変わるといえます。たとえば、昔から「火事場のバカ力」という言葉がありますが、ある種の極限状態に至ると、人は、普段では想像もつかない能力を発揮することがあります。人との出会いによって、「まるで人が変わったようだ」と言われるほど大きな変化を遂げる人もいます。また、環境が変わったことで、急いでばかりの学生が、急に一生懸命に勉強に励みだしたり、逆にバリバリ仕事していた会社員が、急にふさぎ込んで無気力状態になったりするなど、環境や出会いなどによって遺伝子のスイッチがオンになったり、オフになったりして、良くも悪くも、人間は変化するということです。

□ 他を利する生き方 □

なかでも、「他を利する生き方」は、他人のために何かをしているというだけで、自然に遺伝子をオンにしていきます。たとえ小さなことでも、他人のために何かをしているというだけで自然に遺伝子オンになっていくのです。

良いことをしたり、楽しかったり、うれしかったり……。このような良いストレスの場合は、もとも元気な細胞が元気に働いてくれます。しかし、悪いストレスだと、落ち込んだり食欲がなくなったりします。病気になってしまうこともあります。

細胞には、それぞれ役割があり、その役割を果たさないと臓器は働きません。驚くべきことは、自分を犠牲にしてまで他の細胞を生かそうとする

細胞があるということです。体の中を見ることはできませんが、そのようにして助け合っているということがわかります。

ですから、細胞と同じように、助け合っていくことがこの世の中の仕組みならば、当然、私たちも、人と人の繋がりを大切にし、助け合っていくことが真実の生き方なんです。

□ ギブ&テイク □

人間の心のあり方と寿命の関係を実験で調べたことがあります。他人のことを全然考えないで、「おれが、おれが」と何でも自分で抱えてしまう人と、他の人にお裾分けをする人とをコンピュータでシミュレーションしてみると、進化上、後者が長生きすることがわかりました。つまり、「ギブ&テイク」という言葉がありますが、体の中では、「ギブ」が先のほうが進化上、長生きするということです。そう考えると、人のためにボランティアや社会貢献をすると、結果的に、自分の遺伝子を活性化させ、心も体も元気になります。

明るい社会づくり運動が50年という長きにわたって続いてきたのも、ボランティアや社会貢献にはこのような効能があるためなのでしょう。活動をしていくなかで、「ああ、よかった」と、自分の魂に得るものや、元気になってくれるものを感じ得ないと、継続していくことは難しいのではないかと思います。

これからも活躍の場を大切にされ、多くの方との出会いのなかでいい刺激を受けながら、皆さま方ご自身の遺伝子のスイッチをオンにしてください。

さらなる50年に向けて

「明るい社会づくり運動 提唱50周年記念大会」開催

平成31年4月27日（土曜日）——。提唱から50年を迎えた「明るい社会づくり運動」の記念大会は、午後1時半の開演前から会場に駆けつけた全国各地の明社人1500人で埋めつくされ、ロビーでは懐かしい顔とあいさつを交わす姿が見られました。

オープニングは、舞台の緞帳（どんちやう）があがると同時に、桶胴太鼓（おけどう）「阿修羅」の勇ましい演奏に合わせ、佼成学園女子中学・高等学校の書道部による書道パフォーマンスが行われ、縦横5メートルの紙に書き上げられた「伝統と革新」の文字が舞台中央に掲げられました。

続いて、明るい社会づくり運動のこれまでの歩みをまとめた映像が紹介され、主催者の砂川敏文理事長（特定非営利活動法人明るい社会づくり運動）が「築いてきた伝統を継承しながら、社会の変化に的確に対応するため、新しいことに挑戦し、多様性と柔軟性をもって社会に貢献したい」と抱負を述べました。

協力団体挨拶では、立正佼成会会長の庭野日鏡師（にわの にちきやう）に「ご登壇いただき、思いやりの心をもって、世のため、人のために尽くすことが人間として何より大切」であり、「運動の中心をなすこの精神を大事にし、共に力を尽くしていきたい」とお言葉をいただきました。その後、休憩をはさみ、佼成学園女子中学・高等学校吹奏楽部の演奏に続き、「変化する地球と社会——明社への期待」と題した小池俊雄氏（東京大学名誉教授）の基調講演では、「多くの方が治水や環境に関心をもって

いるものの、実際に災害に備えて行動している人は少ない。今後は住民の注意を喚起し、行動を促していく『地域のファシリテーター』が重要であり、その担い手として地区明社のみなさまに活躍していただきたい」と期待を寄せられました。

そして、各地区明社の代表者5人が「明社運動と私の夢」を発表し、澤田章好大会実行委員長（特定非営利活動法人明るい社会づくり運動常務理事）が「大会宣言文」を読みあげました。エンディングでは、会場の参加者も舞台にあがり、スイングメイツの演奏に合わせて『世界に一つだけの花』『手のひらを太陽に』を大合唱し、新たな一歩を踏みだしました。

50th Anniversary

～プログラム～ 開演 13:30 終演 17:15

- オープニング
桶胴太鼓 (team阿修羅)
書道パフォーマンス (佼成学園女子中学・高等学校書道部)
- 50年の歩み ～映像～
- 主催者あいさつ 砂川敏文 (特定非営利活動法人明るい社会づくり運動理事長)
- 協力団体あいさつ 庭野日鏡師 (立正佼成会会長)
- 吹奏楽演奏 佼成学園女子中学・高等学校吹奏楽部
- 基調講演「変化する地球と社会——明るい社会づくり運動への期待——」
講師：小池俊雄 (東京大学名誉教授)
- 軽音楽演奏 スイングメイツ
- 明社運動と私の夢
「未来の子どもたちにキレイな海を」 大岸清 (大阪府)
「家庭から幸せの種まき」 坂本芳美 (北海道)
「児童指導員としての夢」 鷺見和夫 (東京都)
「子どもたちの笑顔のために」 吉濱佳代子 (東京都)
「平和発信基地としてのヒロシマ」 坂本啓彰 (広島県)
- 決意の発表 村上哲也 (NPO法人明るい社会づくり運動ひょうご)
織笠英二 (NPO法人仙台明るい社会づくり運動)
- 大会宣言 澤田章好 (大会実行委員長)
- エンディング
- 大合唱



「明るい社会づくり運動 提唱50周年記念大会」(特定非営利活動法人明るい社会づくり運動主催)をメルパルクホール(東京都港区芝公園)で開催しました。その様子を紹介します。

写真協力 © 佼成出版社

紡ぐ

提 唱から50周年を迎えたいま、これまでの歩みを振り返り、その時、その機会に明るい社会づくりを紡いでこられた方々から原稿をお寄せいただきました。

■提唱50周年を迎えて

平岡 宏一

清風学園中学校・高等学校 校長



21世紀を迎え、物質的な発展は非常に高い段階へと進化し、それによって人が得られる満足は、ほとんど限界まで達しました。そして、その段階に至って初めて、物質的進歩だけでは人は心の充足感を得られないことに気が付き、やがて人々の関心は心の進歩に向かうようになって参りました。

科学者の中でも、また医学の世界においても、健康状態について心の状態を重要視させるようになって来ています。

さて宗教はといえば、その殆どが他者に対しての親切心を説くものばかりで、必ず人類

の幸福に貢献できるものの筈です。特に仏教は、慈悲心とともに、縁起の法則を重要視します。

環境問題であれ、健康であれ、経済であれ、政治であれ、いずれの問題にしても、相互依存の上に成り立っています。

それゆえ、縁起の法則の考え方は、ドラマ法王がたびたび強調されるように視野を広げ、包括的にものを見ていく上で、仏教徒だけでなくすべての人に役に立つのではないのでしょうか。

そしてこの仏教を基盤として提唱された明るい社会づくり運動は、宗教の枠を超えて信仰があろうと、なかるうと全ての人々の幸せを実現しようとする運動です。

この運動への理解が深く浸透すれば、提唱者が望んでいらしたような社会を本当に実現することが出来る筈です。

提唱50周年は、それを機にその尊い提唱の志をもう一度我々の生き方の指針として見つめなおし、実践の中でどう生かすかを考える時ではないでしょうか。

■神仏のはからいに感謝!

永瀬 昌宏

明るい社会づくり運動埼玉県協議会 アドバイザー



有難いご法話を聞いて美味しい昼飯をご馳走してくれると誘われて出席したら、総会前の役員会で殆ど存じ上げてる方ばかり。しかもいきなり理事に推薦されたのが明社との出会いでした。

触れ合う皆さんが信仰心篤く、熱心に活動している姿に感動し、いつしか中枢に参画し、自宅が県明社本部に近いため県に派遣され、やがて県事務局まで拙宅に置かれました。

東日本大震災では、その年の夏休みにご縁のきた宮城県南三陸町の被災者親子を2泊3日で埼玉に招いたり、翌年、夏には避難所に駐屯し、お世話くださった沖縄自衛隊員にサンシンを習った子どもたちの夢「沖縄自衛隊感謝訪問3泊4日の旅」を沖縄や沼津明社の全面支援をいただいで実現できたり……。ご縁と神仏のはからいの不思議さに只々感謝するばかりです。

明社運動提唱50年を迎えたにも拘らず、今の世は50年前以上に心の痛む事象が多発しており、「思いやり」を中核とする明社運動が益々大事であると確信しています。

■心は手づくりではなくむ

佐藤 カヨ

元東京家庭教育研究所講師



山門をくぐり本堂に進むと、つま先がこちらを向いて、きちんと揃えられている170人の履き物が目に入りました。その光景から、参集している方々の心意気、生きざまが伝わってまいりました。

数年前、明るい社会づくり運動主催の「家庭教育講演会」で講演を聞いてくださったこのお寺のご住職が、「お話を聞いてから2人の子どもへの対応が変わりました。だから多くの方にもぜひ聞いていただきたい……」とおっしゃり、再度、講演会を開催されたのです。故に、若いパパとママ、孫育てのおじいちゃん、おばあちゃんがお集りくださっていました。

未来を担う子どもたちを思いながら、真剣に耳を傾けてくださっている姿は尊く、うれしく思いました。

こうしてご家庭の幸せの輪を広げていくという礎を築いてくださったのが、「生きていく限り、人のため、社会のために貢献してく使命がある」という願いを地道に取り組まれているNPO法人明るい社会づくり運動の

これまでの歩み

1969 昭和44年 4 / 27 本運動の提唱。初めての地区推進大会の開催（四国地区・高松市民会館）
1970 昭和45年 各地区において推進協議会結成の促進

1977 昭和52年 9 / 25 「第1回明るい社会づくり運動全国推進大会」開催（東京・普門館）

1980 昭和55年 3 / 30 「明るい社会づくり運動全国協議会」発足（初代会長・前田義徳氏）



1981 昭和56年 10 / 11 「第2回明るい社会づくり運動全国大会」開催（東京・NHKホール）

1984 昭和59年 4 / 29 井深大氏が第二代会長就任

1987 昭和62年 10 / 18 「第3回明るい社会づくり運動全国大会」開催（東京・NHKホール）

1990 平成2年 10 / 14 「第4回明るい社会づくり運動全国大会」開催（東京・NHKホール）

1992 平成4年 4 / 21 福田赳夫氏が第三代会長に就任

1993 平成5年 11 / 20 「第6回明るい社会づくり運動全国大会」開催（東京・普門館）



1995 平成7年 11 / 10 石原慎太郎氏が第四代会長に就任

1997 平成9年 3 / 2 「第7回明るい社会づくり運動全国大会」開催（東京・NHKホール）

1999 平成11年 10 / 24 「発足30周年記念・第8回明るい社会づくり運動全国大会」開催（東京・NHKホール）



おかげさまだと思います。

時代が変わろうとも、社会がどんなに便利になろうとも、人間の心だけは毎日の手づくりのふれ合いではぐくむものです。

私も命ある限り、そのふれあいの一助になりたいと思っております。

■明社運動・半世紀

益田 晴代

新宿明るい社会をつくる区民の会
副会長



ご提唱50周年、誠におめでとうございます。昭和40年代の日本は、国をあげて高度成長の真っ只中でした。首都・東京の街は次々と超高層ビルが立ち並び、緑の自然が消えていきました。街角には、ポルノ雑誌の自販機がそこかしこにあるようになりました。

スピードを上げて変わりゆく社会の風潮にとまどう人びとの様子を歌にした『東京砂漠』が大ヒットしました。青少年のいじめ、シンナー遊び、非行問題がニュースとなり、大人たちを驚かせました。

4人の子育て中の私は、毎日が不安になっていました。そのようなときに、庭野日敬師

のご提唱による「明るい社会づくり運動」が発足しました。

「わが街 新宿明るい町づくり 明るい家庭づくり」

なんと素晴らしいことでしょうか、ご提唱に救われる思いでした。私は地区推進として、「新宿明るい社会をつくる区民の会」設立準備会の花園神社月例会の世話係として参加するようになったのです。そして、二年間の準備期間を経て新宿明社の設立に至りました。当時の役員は、次の方々でした。

会長 田辺哲夫氏

副会長 小野田隆氏

副会長 布施浩志氏

副会長 益田正太郎（義父）

事務局長 豊島永治氏

設立記念大会会場の新宿文化センターに2000人をお迎えし、盛大に開催させていただきました。その大会で私は、加瀬茂さんとともに司会をさせていただきました。そのときの感激がいまも記憶に残っております。本年、「提唱50周年」にあたり、初代副会長の各氏と豊島永治氏の明社運動への熱意とご功績を偲ばせていただくとともに、私を今日まで導き、輝かせてくださった明社運動に感謝の御礼を申しあげます。

半世紀 明社のねがい わがねがい

平和活動 家族を守る

2000 平成12年 11 / 9 「第23回（臨時）総会」「第7回全国

会長会議」で全国協議会の解散を決議。引き続き「特定非営利活動法人明るい社会づくり運動」設立総会で法人設立を決議（東京・新宿ワシントンホテル）

2001 平成13年 3 / 30 内閣府より「特定非営利活動法人明

るい社会づくり運動」認証

4 / 2 特定非営利活動法人明るい社会づくり運動」成立

2006 平成18年 8 / 31 公式サポーター「耀！連隊明社レ

ンジャー」誕生

2007 平成19年 4 / 1 東京都認証のNPO法人となる。

2009 平成21年 7 / 25 < 26 提唱40周年記念事業「全国集会

2009 in にいがた——提唱40周年「更なる飛翔のトキ」を開催（新潟・新潟東映ホテル）

2013 平成25年 3 / 31 第四代石原慎太郎氏会長退任

2019 平成31年 4 / 27 「明るい社会づくり運動提唱50周年記念大会」開催（東京都港区芝公園）

